

あごら

MINI

<53号>

1981年9月10日発行 ¥100 丁45

今月のなかみ

<編集担当・あごら京都>

表紙のことは	母たるは地獄の如し……………竹沢悦子……………1
女・子ども・障害者	家族・地域……………2
9時間のドラマ	阿部ひろ江 塚崎美和子 木野村啓子……………6
8・15マラソン演説会ほか……………8	岩佐行子 吉岡千佳子 野一色満子……………8
お知らせ 女のつどい・女の講座……………8	

- 何でも言える ●何でも書けるミニ雑誌<あごらミニ>
- 小さな<ひろば>=AGORA・<あごら>
- あなたの声を待ってます。みんなでつくる<あごら>

先日、同名のテレビドラマが放映された。テレビそのものも終わる寸前にかいま見ただけだし、沢田美喜氏についてもそれほど深く知っていたわけではないが、そのタイトルを見た瞬間、体の中を戦慄が走るのを覚えた。胎動を感じた時から、母性が体の中を駆け巡り、そして身ふたつになってから始まる延々と長い親子の道程。歎ぶべき子どもの誕生の最初から、私は修羅場を見ることになった。

もろもろの不穏はあっても、今は平和な時代。そんな中で育っている子に本当に「貧しい」とを体でわかる子がどれほどいるだろうか。終戦後十年足らずの頃に小学校時代を送っていた私の家庭もだし、困りにも貧しい家庭はいくらもあった。実父には乳児の時に死別し、養父に育てられた私には、その後、妹も弟も生まれなかった。多感な時代を複雑な家庭環境で育った私には、当然備わっていないかもしれないはずのノーマルな男性観は形成されていなかったようだ。そして一番重要な時代を傷だらけにして過ぎてしまったのも残念なら、巣作り十年目の現在でも、かつての家庭の中での人間形成が、その後の母性にも大きく影響を及ぼすというところは実践を通じて言える残念なことの一つなのだ。

兄妹のいない私が、歪んだ青春の果てに逃げ込んだ結婚という制度が作り上げた男と女の正常な形。人一倍淋しがり屋の私が待ち望んだ初

母たるは地獄の如し

竹沢悦子

めての子に付けられた病名は「脳性マヒ」。眠る、飲む、泣く——これを繰り返すはずのわが子は、生後それをせず、最初から異常だと感じられた。そして一年の間、何かに憑かれたように昼夜泣き通すわが子を前に、私たちの地獄のような毎日が始まった。マシユマロのような何度、私たちは号泣しながら平手打ちを食わせたことか。晴天の霹靂。それはまさに私たちの作り始めた家庭という形をメチャメチャにしてしまふ出来事だった。どこかで聞いたことのある病名。でもそれは私たちには何の知識もないに等しいことだった。一歳の誕生日を迎える頃から、脳性マヒ独特の体つきが頭者に現われてきた。その後も地獄は続き、五回の入院を繰り返した。あわやと病院へ駆け込むことは何度あったろう。その後、妹として生まれた子も千六百グラムの未熟児。

障害児を持つということのあらゆる場での痛みをぐぐり抜け、そしてこれからはそれはもつと切実になるであろうそんな時に、私は仕事を辞めた。そして四年。子供から逃げたいからではなく、一人の女性として、根を張った生き方を求めて、女として何と泳ぎにくい、「男が作った社会」の中で、私は重度の障害を持つ子と、たまたまその妹と生まれた子の二人を傍らに、これからは試行錯誤を繰り返していくだろうと思う。

<あごら>公開学習会

●国民総背番号制と女

吉武 輝子

●女と情報——南北問題としての「情報」を考える

斎藤 千代

◆9月18日(金) 6時—9時

◆四谷公会堂3階集会室

(地下鉄丸の内線「新宿御苑前」より徒歩5分、バス「新宿一丁目」より徒歩1分。大木戸そば) 電話 341・2991

お待たせしました!

『遊んで育てる』が出来ました

△可能性教室▽英語水曜クラスの方々の勉強の成果が本になりました。子どもと一緒に身近な材料を使いながら楽しく遊ぶ、すばらしい育児書です。母親と父親の「育児力」を育てる本とも言えます。ぜひ一冊を。定価千二百円。△あごら▽会員の方は一割引きになります。

あごら京都

女・子ども・障害者—家族・地域

生のはざまで

阿部 ひろ江

今、愛する人と共に暮してはいない。周囲の人たちへの思惑や自分の抱えているもののしんどさからか、彼はわたしに自分を開いてはこない。出合いの頃の生き生きとしたイメージもない。そうした時の性のありようは、現実とのギャップの大きさにうつろな思いがする。性は互いの身を相手に預けざるからだ。

私生活と労働の場が分断されている現代にあって、自分のエネルギーの大半を使い果たす労働の場での彼との出合いを失っては、そこから先の彼との関わりを構築していく自信のなかったわたしは、逆に同じ職場を選んだことから彼を苦しめることになった。

女と男がのびやかに出合い続ける場は今の社会にはないのだろうか。人の世で

遅々とした歩みの人あごら京都V。メンバーもさほど多くもない。にも拘らず、いろんな女がいる。月に一度の例会。ひとりが語る言葉に、表面上「うん、うん」と頷き返しながら、内心異和を感じている。立場上の違い。主婦である女は、仕事をしている女の言葉が理解しきれない。その反対も然り。でも、その時は毅然として切り返すことをしないです。繰り返して繰り返して語られた後で、いつしか投げかけられた言葉が逆光となって、わが身を浮かび上らせているのに気づく。そうして、互いに照らし出されつつ、女の生の総体を人あごら京都Vで捉え返す。

最も大切に考えられるべき生、それを孕む可能性を持ち、人と人との関わりを原基ともいえる男と女の性のありようをタブー視し、歪曲してきた社会。そして男にとつて今、一人の女は全存在を投げ出すに値しないものとなっているのだろうか。一方で、女—男—子ども—労働—生活の関わりを取り戻そうとする試みはあるが。

わたしは籍の問題にこだわり続けてきたが、娘を産む時、籍を入れざるを得なかった。その結果は、どろどろとした離婚劇だった。今、籍を入れる、入れないは女と男が関わっていく上で二義的な問題で（戸籍制度と闘っていくという点では大事だが）大事な女と男がどのように向きあっていくか、周囲がおしつけてくる既成のあり方にどう対抗していけるのか、ということだと思ふ。とは言っても、制度や常識的なあり方にいつのまにか絡め取られる部分は大きいと思うが。女と男の関わり性について、わたしの中ではずっと「試行錯誤をくり返し、暖めてきたものであっても、彼（たいていの男）

にとつては突然つきつけられることのようにだ。おそらく今は彼の方だけに向き合えず、じつと見ているはかばかしいのかもしれない。自分をそこまでコントロールできれば、の話だが。また娘と二人暮らしでは他に人間関係を開いていくことも限られた状況にある。

今、彼とつきあい続けようとする葛藤の苦しさから何度も彼を切ってしまうたら、と思つた。けれど、彼の中にあるであろう差別された者への共感や出合いの頃のイメージ、また、離婚劇のさなかで追いつめられていた時にも、子どもとわたしを遠巻きに見守り続けてくれた彼を想う時、それもできない。

娘と二人の生活の中で、娘の生き生きとした人との対応やさまざまなものへの発見、その変貌ぶりにはいつも驚かされ、一方で自分の大人として固定化したありようを反省させられる。けれどやはり二人きりの生活は時にわたしをくじき、気弱にする。

女が子どもを産み育てる時、その回りにそれを見守るゆるやかな人の群れ——

できることならその女と子どもの存在を受け止める男の存在があるのが自然なのだろう。ましてこの激烈な社会で、子どもと自分が生き切るために食いぶちを稼がねばならないわたしには、わたしの存在を丸ごと受け止めてくれる存在がほしい。そしてわたしに向かつてその存在を投げ出してほしい。

女と子ども——決してそれが閉じてしまわないものであってほしい。結婚していった頃、ある人に強く魅かれたことがあった。それは夫にはない、わたしの存在をゆさぶる存在だった。けれど夫や子どもの存在が、わたしの内奥から彼を求め、力にブレーキをかけた。わたしが身軽な身なら、どんなにか願ったことだろう。そのことで彼との出合いを失わなければならなかったからだ。

今、娘の存在はわたしにとってやはり心にも行動にも足枷となる。けれど、もはや娘の存在がなければいい、とは思えない自分がある。娘の存在はそれだけわたしの中で大きく、その関わりはわたしの生活の中で重要な部分を占めている。

そして、身軽なわたしを想像することができなくなっている。身軽なわたしは糸の切れた風のように思えるのだ。

身軽な存在とは何なのか。誰の生に対しても関与しない生とは？ 人は一人で生きられない。長い生の道のりの中で誰かに生を預け、また預けられることがある。その意味で、人は皆何らかのヘンディキャップを持っているといえるだろう。同様に、一家族は一族のみでは閉じてしまえないものがある。一つの家族のたどる波には、好調の時もあれば不調の時もある。一つの家族だけでは背負いきれないほどの不幸を背負い込んだ時がその家族の解体する時だ。そんな時、その家族のまわりの地域の人たちの支えがあれば、その家族は解体せずに済むだろう。

今、さまざまな地で共同作業所や共同保育等、共同性への模索が試みられている一方で、地域の共同性の欠落がまだまだ大きい。

また、養護学校の一教師として地域の学校を見る時、本来多様な地域住民のものであるべき学校が、一人の例外的な存在をも許さないような画一性指向に走っている、日本全体が戦争への道をひた走っているように思えてならない。

家族のくみかえを

塚崎 美和子

「A君も、結婚していれば退院できるのだけれど……」ぼそりと夫は言う。うつ病で入院を繰り返すAさんは三十三歳。独身。発病してから十年近く経た現在、生家は兄弟姉が跡を継ぎ、帰っても彼のいる場がないという。家族からやっかい者扱いされ、はじき出されている。彼は「結婚したい」が、口癖だ。

電話が鳴る。「毎日、自分が刻々老いて行くのが感じられ、耐られません。自分からあらゆるものが失われて行くのです。共にこのつらさを分かち合う人もいませんし……」離婚してアパートで一人暮らしBさんは、四十七歳。深夜に涙声で淋しさと不安を訴えてくる。

Aさんは病気のため新しい家族を創り出せずに、Bさんは家族を解体させての単独生活。入院を繰り返している。

一方、核家族の閉塞が語られて久しい。家族がいても、孤独は孤独。外へ働きに行く男と家で子育てをする女が創り出すマイホームは、分業の軋みで喘いでいる。機械文明・物質文明の歪みが私たちの心に暗い影を落としていて、私たちには人間的な自然な関係を創るその生命力さえ萎えかかっている。

恋愛が成立しないとも言う。恋愛がなく、他者を快楽の手段化した性交のみが辛うじて存在する。どの人からもわびしき切なさ立ちのぼる。

こうした状況だからこそ、女と男が対になって補いあい、生命を共に育むことを私は目指したい。過去と未来を統一的に生きるには、家族を組むしかないと思つてスタートさせた結婚生活も、もう十

年近くになる。相互のテーマがずれたこともある。ずれてなお、二人の間に生まれた幼い生命を育てなければならなかった日々。社会の矛盾が形を変えて私たちに投影されているのを感じても、どうすることもできなかった。

人生には避けることのできないこともあるのだなあとという感慨が胸に染みだした。しかし、そうした精神的、肉体的不調の日々を支えたのは、まぎれもない幼い二人の生命の輝きだった。ちよつとした微笑、しぐさにどれほど慰められたことか。

AあごらVで出会ったあの人、この人の存在が私を励ました。家族の枠を二、三步越えて結びあえる人のいることをありがたと思った。

私自身、家族解体の方向へ進むのではなく、家族関係のくみかえを模索してきているのだけれど、まだまだ頼りない。

労働力の再生と生命の再生産という命題だけを「家族」(女)が担うとしたら、あまりにも貧しいのではないか。対を組んだ意味を問いつけたい。夫の向きあう世界と私が向き合う世界を、どこかで交わらせたい。性別分業を越える仕事を共に創り分つこと——つまり家族内における関係性を、社会的・歴史的課題とからませて、育て、組みかえ行きたいというのが私の願いでもある。

月一回、精神科の患者さんたちと一緒に我が家で食事会を開いて、もう一年以上になる。若い人から老人の域に達する人たちが十数人集まる。ビールを飲み、ワイワイ、ガヤガヤしゃべりながら、テーブルの上の手料理を片付けて行く時、

どの人の顔にも束の間の暖かさが漂う。ちよつと気を緩めると、ふわふわと霧散してしまいうる人と人とのつながりだけと、私は貴重なものと思える。そして、こんな場がなんと少ないことか、と思う。

文頭のAさんもBさんも食事会のメンバーだ。私たちと共に、病者の境を越えて自分の住む場で自立的に人間関係を、しなやかに多様に創り出せた時、AさんもBさんもちよつとずつ病気が治るのだろう。彼らをはじき出し、「狂気」の世界へ追いやって私たちもまた病んでいるのではないか。人間疎外のただ中において、私たち健常者こそ、障害者と結びあえる関係性をマイホーム家族関係に代って望んでいることを、私は表明したい。

見えてきた子どもの姿

木野村 啓子

二人目の子どもの出産を機に、家庭に入って数年。子育て中心の生活の中に自分を閉じ込め、生きあぐねてきた。仕事を持たせたいと何度か職探しをしながらも子どもとの関係にこだわり、引き戻されてしまう。こんなことを繰り返してきた。何が何でも母親でなければ、という思い込みがあったわけではない。働き始めようとした場合、身の回りにしつかり子どもを受けとめる受け皿がないのが、私を必要以上に不安にさせた。

しかし、子どもと密着して暮らすなかで気づくのは、母親が働こうが働かないが、地域社会に子どもを育み、支える受け皿がないことである。たとえば、家に居る母親が病気で寝込んだとしても、おばあちゃん的な役割で支えてくれる制度はないし、そんな人間関係も育ちににくい。家族の中で、親が子を守り、子は親を頼るという形で、親と子がひとかたまりになって切り抜けるしか術がない。崩れまいと必死になればなるほど、密着関係は強くなり、閉鎖的になっていくのが、たいていの母と子ではないかと思う。私も決してその例外ではなく、子どもがまだ幼くギリギリ舞いの頃、ことさら身構え、子どもを抱えこんでいた。ベッタリとくっついて離れようとしないうち子どもに腹を立て、そんな自分自身にイラ立った。排他的な母子関係に落ち込み、うちもさっちもいなくなっていたのだと思う。

子どもらとの間に、どこかギクシャクとしたような関係は続いている。それでも、子どもらは母が傍に居ることを支えに、私は日々成長していく子どもを確かめながら、走り抜けてきた。子どもらは確実に成長した。その子どもらの肩の上に、いろんな子どもたちの問題が見えてくる。全く母親と相似の格好で、人間関係を断たれ、ひとりぼっちに陥っている子どもたちの姿が。

ウサギ小屋と呼ばれる住まいに不似合いな特別室、ふんだんな物を所有しながら、人と出会う機会を封じられている。子どもの溜り場というべき場所がない。

自然な形で、子ども同士（勿論、大人たちとも）出会う機会がない。子ども同士顔を合せても、うまく遊べない。一緒に遊ぶ機会があっても、感情をぶつけ合い、とっくみ合いのケンカになるような衝突は、周囲の大人に治められてしまう。保育所、幼稚園、学校といった公的な場では、管理的な指導が強められている。い、人との関係を育てることができないのか、考え込んでしまう。心配するまでもなく、大人の発想とは別な子どもも特有のやり方で、自分を育てているのかもしれない。しかし、私にはまだそれが見えない。

私は子どもらと寄り添って暮らす中で、母子関係の歪みが、子どもらに大きな影を落しているのを見てきた。母と子の関係は開かれなければならない。そんな思いで、子どもらの遊び仲間のお母さん方の間をかけずり回っている。もっと、素肌をさらさなければ、ほんとうに結び合うことはできないと、私自身に言い聞かせながら。

子どもと教科書

岩佐 行子

教科書問題が騒がれ出してから、あわてて子どもの教科書を取り出して読んだ。小学二年の国語に「かわいそうなぞう」という戦争中の上野動物園での事実

をもとにした話が載っていた。空襲の最中、軍の命令で動物たちを次々に殺さねばならなかった状況を、象と象の愛情を中心にして暖かく描いているが、それでも戦争のむごさがにじみ出ている作品である。

象と共に生きてきた人間が自らの手で殺す事が出来ず、飢えて芸をした姿で死んだ象に取りすがり泣き叫んだ象の悲しみ。心の中で「戦争を止めろ」と叫ぶさし絵をみて胸が痛くなった。そして、これを知りたがった秋になれば皆と共に学ぶであろうと思うとほっとした。戦争問題を身構える事なく、子どもたちに身近な動物からすつと入り込めるように配慮されている。ひとりひとりの子がどう受け止め、親や教師の想いをいかにふくらませるか、気長に見守るほかにないが、年齢に応じ、事実を直視する時間を持つのは必要だと思う。

新聞で「おおきなかぶ」「かさこじぞう」が問題になった時、理由が納得できなかった。何度も読んだものだけに、こじつけとしか思えなかった。しこりを残したのも束の間、続いて教科書会社の政治献金までが明るみに出た。本来なら中立であるべきはずの教育が、金で売り買われていたとは思ひもなかった。だが冷静に見つめれば、確かに動めく何かを数を増し、仕組まれていた感がある。教科書無償制廃止論が出たり、検定から、中学の教科書が全面改定されたり、儲けによる裏取引が確実にあったのだ。教育の荒廃が久しくいわれてきたが、わが子の姿を見る限りさして大きな問題も

ないようになら観してきたが、教育そのものが汚れてきた以上、現実はどう対処すればいいのだろうか。戦後生まれの私だが、検定の先を考えるとぞっとし、戦前のスミ塗り教科書がちらついたりする。「あごら24号」を読んで教育の重さを強く感じ取っただけに、一連の問題は素通りできない不安を残す。

私が高校生の頃、日本史の教師から検定の話聞いたことがある。記憶も定かではないが、家永三郎氏の名と、赤い表紙の本、それに一枚の写真が蘇る。あの写真は日清戦争の頃のものだったろうか、着物の姿の女と子どもが、ひっそりと誰かの帰りを待つように座っていたのを覚えている。素朴な疑問を抱きながら、なぜチェックされたのか、深い意味も汲み取ることなく過ぎた。戦争を肯定的に見る者にとっては、一枚の写真が暗さを示すイメージとして拡がるのは、今になってわかる。

教科書が日本の教育の主になるものであるなら、学ぶ者の人間的な深さに強く根を下ろし、物の考え方にまで結びついてしまおう。その大事な教科書が、時の政権によって揺れ動いてしまつては困る。教育の構図が見えた今、子どもの権利を守らねばならないと思う。次代を生きる彼らに何を伝えるべきか、大人たちが真剣に考えねばならない時がすでに来ている。私自身の内にも、反戦の炎が灯り始めたところでもある。

主婦と住民運動

吉岡 千佳子

最近大学で、「科学の巨大化といわれる現象に、産業技術の成長につれて矛盾が現われてきて、住民運動と共に科学者のあり方がかわってきた」という話を聞いた。一九四六年に「民主主義科学者協会」が行政から独立して科学を立案する機関として設立されたが、実際には科学と政治は切り離せない状態になっている。現在でも内閣は学術会議に諮問することができ。一九七三年には「科学研究者の社会的地位に関する勧告」がユネスコから出されている。これは、研究が生態学的（社会的）にみてどんな結果をもたらすのか評価する能力を持つ科学者を養成するよう国が保障しなさい、また科学研究計画を立てる時に研究者に参加する権利を保障しなさいというものである。今後の課題として最終的にその計画から退く権利を保障すべきであるというのだが、それぐらい、産業技術の成長につれて科学者が社会正義を持ち続けて研究していくことが難しくなっている。そしてこの科学のあり方に対する社会の規制力として住民運動を位置づけることができる。これは、さまざまな公害防止運動（水俣病・四日市・三井三池・白ろう病）にみるることができる。

私が今注目したいのは、その中でも地

域社会を支える主婦の運動である。「水ましマーガリン」やタクアンの色づけに使うオーラミン、ジュースに使われた人工甘味料などを続々と摘発している。なかでも「小児マビをなくす運動」は、科学行政を、はじめて国民が、子を持つ母親が、動かした運動といえる。一九五九年青森県八戸市でポリオが流行し、主婦がソ連の日本語放送でボンボンワクチンのことを聞いたことから地元医師と主婦によるワクチン入手のため運動が起こった。当時の日本はワクチンはアメリカの輸入に頼っており、アメリカでポリオの集団発生があつて輸入できる量も限られていた。また、子どものいやがる注射をしないで甘いボンボンを食べるだけでよい生ワクチンは日本の医師協会では知られていなかった。日本の医師の間は合わせでソ連から三万人分のワクチンの寄贈があつたが、税関によって抑えられ、厚生省はアメリカから輸入するワクチンが来るのを待ってそれを先に輸入しようとした。全国の母親の電報や投書で、ようやく、タダのワクチンは八戸市に送られ集団接種できた。政府は翌年もくりすにワクチンの手当てをしていなかったの

で、またまたアメリカのお世話になるハメになった。その年の第六回大会で「医学に国境はないはず。アメリカでもソ連でも、いずれのワクチンでもよい。大量に輸入し、すべての子どもたちに無料で予防接種をせよ」という決議により、全国で署名運動、抗議運動が起こった。この母親たちの強い決意と行動力によって、政府は緊急閣議で、予備費で一億三

千万円を支出することになった。当時、学者たちのなかに、生ワクチンをほんとによく知っている人は少なかった。なまじ「学」のあるお医者さまより、子どもを救いたい一心の母親たちの方がより知恵も力も出せるようだ。

いのちの乱舞を

野一色 満子

夕焼け空に浮かぶ、ほの明るい橙色とも薄赤紫色ともつかぬエロス色をした雲のまにまで抱きしめ合い、甘ええられ、のびやかに生きたい。

夕暮れ時、私の体を借りていのちを授かったまもなく五歳になる女の子と海へ出かけ、それぞれが相手にふわふわと海の波間に浮んで時を過ごす。地平線には夕焼けが広がり、空に三日月が見える。時折、どこかの家族連れが打ち興する火花が空を舞う。

家族は、それぞれの内的な自己史の織りなすさまざまな色合いを呈するものなんだらう。でも、やっぱり、奥深い底なしのほうつとはの明るいただびるげな優しい性愛を内に宿したものが家庭なんだらう。互いの存在を文句なしに受け入れのびやかにその色の輝きを根っこで支え合っている者同士を家族と私は呼びたい。

社会が悪いなんて、もう、ずいぶん言ってきたような気がする。ぶ厚い殻をつけたまま。自らの殻を剥ぐのみだ。殻を

被ったまだ大人になりきらない者たちが形づくるもの——性愛・家族・仕事・社会——は当然歪んでしまふ。歪みが歪みを産むなんて小理屈で、歪みは決して少なくなりはいない。むしろ、増殖。いのちもあるものが殻を脱ぎ捨て、「私も生きていよう」「私も生きていよう」と、そんな茫漠とした広野での合唱、合奏が奏でられるだけでいい。いのちの乱舞を。

なんで、この殺風景なことが増え続ける必要があるんだらう。私には、今のままだまだ家父長制を背負い込んでしまっている家庭は、窮屈すぎたお尻の刃がもぞもぞしてくすぐつたい。二人で家庭を作るはずだったのに、世間並みの「主人」への未練を絶ち切れず、苛立ちを隠すこともできない優しげで不器用な男との、狭い四畳二間のアパート暮らしに堪えられないほど整然とした女であり続けようもなかった。

子どもに、なおや女の子に、女としての生が、人としての生がそんな貧困なものとして映じ刻印されることにがまんしかねた。狭い家庭から、広すぎる社会へ解き放つ形に相成る。自らが舞うための心の旅は、誰も手を貸さないし、それだけが背負いきる以外ない。

夕焼け雲の抱擁を内に持たない自生など、くそくらえ。性愛を、家庭を欠落させた所には荒野しかない。のびやかな自生を、自立し得ない者が軽々と入り込め、共生しあえる社会をいつの日か願わん。黒々しく焼けただれた魂、黒々しくすすむ魂、己の、他の魂に熱き息吹きを。

◆9時間のドラマ——8・15マラソン演説会

政財官界一体となつての露骨な反動化が毎日に不気味な加速を増して行く情勢の中、今年の八・一五は、各地でそれに對抗してさまざまな反戦集会が行われ、例年になく盛り上がりを見せた。

「戦争への道を許さない女たちの連絡会」では、朝の十時から夜の七時まで、延々九時間にわたる「マラソン演説会」を遂行した。会の呼びかけ人を中心に、有名無名の女約六十人が、渋谷駅の前、公前に横づけした宣伝カーの上から、道行く人々に平和の危機を訴え、ともに戦争への道を許さないために力を合わせようと呼びかけようというものだ。昨年の十二月の発足以来二度の場内大会を経て、今回初めて街へ出たのである。

朝十時、司会の吉武輝子さんが口火を切ったのに続き、午前中は樋口恵子さん、俵萌子さん、澤地久枝さんなどが続々と登壇し、道行く人々の足を釘付けにした。婦人民主クラブ、日本婦人会議、あこら、行動する会、草の実会と続く中、中山千夏さんや下重暁子さん、山崎朋子さん、郷静子さんといった人々も駆けつけ、集会は大いに盛り上がった。

一枚のピラを頼りにやって来た人、偶然通りかかった人、広場の人々はさまざまであつたが、常に五百人を越す群衆の熱いまなざしが、そこにはあつた。車の前には「10フィート運動」がアメリカから買いつつたヒロシマ・ナガサキの原爆フィルムや、教科書から削除された丸木夫婦の「原爆の図」のパネルが展示され、人

々の注目を浴びた。右翼の襲来を想定してか、女たちの車のまわりは機動隊の装甲車でとり巻かれ、ものものしい雰囲気だ。それでも、妨害者たちはやって来た。聴衆の中にわけ入り、声高な歌声で女

たちの声をかき消そうとした右翼宗教集団、トラックを乗り付け拡声器一杯の声をぶつけて来た若者たち。それでも女たちは中断することなく、想いのたけを訴え続ける。「平和とは、自由とは、神や愛などという言葉を声高に並べて、人の言葉を封じようとするような行為からは決して生まれぬ、と私は思うのです」と澤地久枝さん。聴衆のわれるような拍手が賛意を示す。

日の丸を掲げ、声を限りにファナティックな国防論を叫びつづける青年たちの声に邪魔されながらも、七十歳をとうに越えた井上アイさんが、夫と息子を失った自己の戦争体験をせつせつと訴える。大きく傾く中年過ぎの男性たち、感動に震えて手を取りあう若い女性たち。朝早くから詰めかけていた報道人たちが、右翼の青年たちに抗議している。取材という範疇を越えて彼らが熱狂するのを私は確かに見た。

夕陽が迫り、街のネオンやアーク灯が人工的な明るさを作り始めた頃、女たちは限られた残り時間を気にしながら、口早に喋った。九時間があつたという間に経った。誰からともなくわき起こった手拍子に包まれたながら、女たちは終わりの刻限を迎えた。日暮れて後の湿った涼風が、

灼けた首筋と腕に吹きつける。この日、ほとんどぶっ続けて車上に立ち続けた私は、このフィナーレに、寒さと込み上げて来る感動によって震えながら臨んでいた。

◆「おんなたちの太平洋戦争」——戦争体験を風化させたもの——

国民がみずからその戦争体験を風化させたのか。それとも、無理やり風化させられたのか。いずれにしても、戦争体験とは「公」のものとして余儀なくされながら、それに伴う肉体的・精神的苦しみは、私的に処理させられる。忌まわしい思い出であるだけに、人は固く口を閉ざし、孤独のうちにその苦しみから逃がれようとする。

戦争を知る世代が半数を割り、しかもその体験を黙して語らず、戦争を知らない世代がその体験を引き出そうとしないならば、この貴重な体験は風化の一途をたどるであらうし、こうした現象は次の戦争をたくらむ者には、願ってもないものであるに違いない。個々人の中にもうずもれている戦争体験を公のものとして引き出し、伝え合うことが進みゆく風化をくいとめる第一歩であるという思いからこの会を企画した。

東京・横浜の空襲の中を逃げまわった人の話、戦時下で青春を送った人の心情、大陸で生体解剖をした元軍医の話、予防拘禁で心身の自由を奪われた人の話……。他人を侵しつつ、自分自身もまた家族も侵されていた時代。

あの戦争をくいとめることはできな

それはまさに、九時間のドラマであつた。女たちは、そのドラマが九時間という有限の時間であつたことを惜しみながら万感の想いを込めて、その手拍子に和したのだった。(谷内真理子)

ったのか。これは、私たちが抱いた素朴かつ大胆な疑問である。戦争に反対した人も少なからずいたはずなのに、何故？そこで浮き彫りにされたのは、巧妙な準備と苛酷な弾圧だった。予防拘禁を現在問題となっている刑法改悪、保安処分への導入と結びつけて話されたときは緊張した。私たちの現在おかれている状況をもっと掘り下げることが、今後の課題だと痛感した。(本郷靖江)

(この集会は、秦野市立大根公民館・現代女性講座実行委員会の共催で、去る8月15日秦野市大根公民館で開かれた。)

女子医学生連絡会
準備会が発足

「今、問い直そう。医の原点」をテーマに八月三日〜六日千葉で開催された第24回全国医学生ゼミナール(医ゼミ)で、医ゼミ史上初の女子医学生分科会がもたれ、百二十名(うち約二十名は男性)以上の参加があつた。分科会では、「どうしたら人間らしい女医になれるか」を女医の実態、女が働き続ける上で大きな障害になっている諸問題——保育・母性保

障・男性の意識を取り上げ、レポートと講演が行なわれた。この分科会の後もたれた講師と語る夕べの席上、「横のつながりがほしい」との声が多くきかれ、同会の誕生となった。詳細は左記へ。

千葉市亥鼻町1の8の1 千葉大医学部 気付 石原典子
札幌市化区北13西4エルムハイデンス 六一六号 岡本ともみ

『遊んで育てる』が できました

たいへんお待ちせしましたが、ハ可能性教室V英語水曜クラスの方々の翻訳による力作、『遊んで育てる』が、本になりました。

子どもを塾に通わせたり、幼児教育に熱心な親は多いようですが、身近な道具を使って「子どもと一緒に遊ぶ」親は比較的少ないのではないかと思います。高価な遊具や教材はいい使い使わず、あきびんやがらくたを使って、遊びの中から子どもの心身の発達を助け、潜在能力を伸ばしていく方法を具体的に示したこの本は、両親はもとより、保育所や幼稚園

事務員募集

時間 9時～17時(昼休み30分)
給与 十一万五千元
静かな職場。英語ができればなお可。
マンカインド社
渋谷区渋谷2の2の1木村ガーデンビル2F
☎03-4981-2921

の先生にも、大きな示唆を与えるものと思われまます。子どもを育てる側の、「育児力」を伸ばす本でもあります。ぜひ読んでください。

翻訳なさった可能性教室の七人のお母さん方、おめでとう！

刊行費用の不足分を出資して下さったハあごらV会員の皆様、ほんとうにありがとうございます(お蔭で、予定を少し越える額が集まりました！)。

(B6判 272ページ 定価1200円 BOC出版部刊。ハあごらV会員の方には定価の1割引き1080円、出資者には2割引き960円でお頒ちします。送料は1冊240円、2～3冊300円、4～5冊350円、6冊400円、7～10冊800円、11冊以上サビビス)。

〔振込先〕東京31139331 BOC



可能性教室 翻訳グループ 第二弾は 『やせる本』！

『遊んで育てる』で、翻訳者への道を歩み始めたハ可能性教室V英語水曜クラスの有志が、第二弾、『やせる本』を訳しました。

なぜハあごらVで『やせる本』を？

疑問は、読んでいただければ水解すると思います。「肥満」の根底にある心理的要因を米国の女性臨床心理学者が追求した、「心理的減量法」なのです。無理な節食などせずに、自然にスマートになるという実験経過はなかなか説得力があり、目下、編集者自身も人体実験中(?)です。

——ということ、この出資金も、また公募します。条件は

●一口三万円。一年据置き。年利八%。(何口でも可)

●振替で、東京31139331 BOCへ

●出資者には一冊無料で贈呈します。出資者は定価の二割引きで購入できます。

●公募金の返済はBOC出版部が責任を負います。

お詫び

あごらミニは、恒例により八月は夏休み休刊となっております。七月配布分に、七・八合併号とするべきところを、明記をおこたり、皆様にご心配おかけしてしまいました。深くお詫び申し上げます。

〔編集後記〕

この四月に二回目の合宿を持った。その時のテーマがこれ。女や子ども、障害者といった弱者(?)を取り巻く状況としての家族、地域を捉え直さない限り、解放への手立ては得られないのではない。家族も地域も、社会の経済構造や対男とのあり方などさまざまな要因を受けて変質するが、だからこそ、なおさら。

(ハあごら京都V)

育ち合い

—保育をわたしたちの手に—

編集・婦人民主クラブ
パンフレット委員会

価 五五〇円
〒 二〇〇円

このパンフレットは婦人民主新聞一九七九年二月九日号から約二年間掲載してきたシリーズ「育ち合い」を集録し、なお保育の全体像をつかむために若干の補足・資料を加えたものです。ここに見られるたくさん実践は、多くの示唆を含むものですが、産休明けや長時間保育論争にみられるように、特定の保育像を提出したのではなく、意見の隔りは隔りとしてそのままだ、今後、子供と共に育ち合う関係を模索する一つの手がかりとなれば幸いです。

- I 保育所はいま
- II 産休明け保育と長時間保育
- III 保育労働者の労働実態
- IV 差別とたたかう保育
- V 男の子育て
- VI 諸外国の保育状況
- VII 保育行政
- 資料篇

■送料一冊二〇〇円、二冊二五〇円、四冊まで三〇〇円、七冊まで三五〇円、十冊まで四〇〇円です。

■お申し込みは書記局へどうぞ。

婦人民主クラブ

〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会	場
9月9日(水)	13:30~16:30	戦争を許さない女たちの杉並の会・久我山集会「女と戦争」一斉藤千代、11月集会の相談など。参加費300円 連絡先 391-7427 長谷川		久我山会館	
13日(日)	13:30~17:00	あごろ浦和・例会「結婚」		浦和コミュニティセンター	
	18:30~	あごろ札幌・例会		喫茶のあ 011-511-1377	
15日(火)	13:00~18:00	民主と連帯の中野野外コンサート 出演者・新里愛蔵 白竜バンド 高橋悠治&水牛楽団+李政美ほか<野外コンサート実行委員会> 03-388-0719		中野駅北口広場(雨天一中野公会堂)	
17日(木)	10:12~12:30	あごろ東海・例会		名古屋市婦人会館	
	10:00~16:30	主婦のための再就職セミナー①「どうすれば働けるか」一樋口恵子、パネルディスカッションなど<わいふ>参加費無料 連絡先 03-260-4771		新宿文化センター小ホール(託児あり)	
	18:00~21:00	結婚の意味を問う継続討論「料理だって裁縫だって一流だって言われるのはやっぱり男さ……」参加費無料 連絡先 03-354-2543 藤村		豊島振興会館	
	18:30~21:00	私たちの仕事論・賃金論<鉄連の七人と共に性による仕事差別、賃金差別と闘う会> 連絡先 03-355-6343		ジョキ	
18日(金)	18:30~21:00	あごろ公開学習会 「女と情報」講師・吉武輝子 斎藤千代		四谷公会堂(3階集会室) 03-341-2991	
19日(土)	19:00~	あごろ武蔵野・例会「今後の会のもち方」など		かわら版事務所	
20日(日)	13:30~17:00	あごろ京都・定例会			
23日(水)	13:00~16:30	私はこう思う 新聞の主に家庭・婦人欄を読んだ話の話し合い 参加費無料 連絡先 03-354-2543 藤村		渋谷勤労福祉会館	
24日(木)	10:00~16:30	主婦のための再就職セミナー②「働くことに自信をもとう一夫説得法」河野貴代美「再就職、私の場合」ほか<わいふ> 連絡先 03-260-4771		新宿文化センター小ホール(託児あり)	
25日(金)	18:30~	あごろ北東京・例会「後期行動計画について」		婦人協同法律事務所 03-985-3308	
	18:30~	連続トークイン「ノーと言えるか職場のお茶くみ」<私たちの男女雇用平等法をつくる会>		ジョキ 03-357-9565	
26日(土)	14:00~	87歳の青春上映会<福岡女たちの映画会> 連絡先092-713-6971		都久志会館(託児あり一予約)	
27日(日)	12:00~17:00	あごろ柏・例会		柏市旭町近隣センター	
	13:30~	女性講座・政治っておもしろい?……!政治ざらいの女たちへ 中山千夏・矢崎泰久 <女性講座実行委員会>		秦野市大根公民館 0463-77-7421	
30日(水)	18:30~	あごろ京王・例会「老人福祉を考える」		福井宅 03-308-7871	
10月3日(土)	13:30~16:30	家庭科の女子のみ必修は憲法違反か? 講師・井田恵子 <家庭科の男女共修をすすめる会>		婦連会館	
4日(日)	13:30~	女性講座・女と平和(仮題)もろさわようこ <女性講座実行委員会>		秦野市大根公民館	
	14:00~17:00	明日をひらく教室 女と主婦の状況 PART1 ♀主婦、助人:高橋ますみ <OKAIREN・あごろ京都共催>		京大楽友会館	

各地のあごろ連絡先

旭川市神楽岡一条五丁目3 田代優子 016-66551237	あごろ旭川
札幌市中央区南25西ニユー藻岩503 高橋芳恵 011-5633917	あごろ札幌
仙台市青山1-13 三船照子 022-2291227	あごろ仙台
あごろ浦和	
埼玉県浦和市南浦和2-19-8 国井マツ江 048-8887736	
あごろ柏	
柏市豊四季台3-1-6 8 古賀節子 0471-451682	
あごろ北東京	
豊島区東池袋1-45-11 ゴン金子202 03-35330811	
あごろ武蔵野	
小平市小川町1の7 6 3 の8 6 丹羽雅代 0422343373	
あごろ京王	
調布市仙川町3-12-32 福井浅子 033308771	
あごろ神奈川	
川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方沼田千恵子 0444933399	
あごろ東海	
愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-6 伊藤汎美 0561339922	
あごろ京都	
京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子 0757791146	
あごろ大阪	
吹田市出口町30-20 北垣由民子 063877099	
あごろ九州	
福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子 092252176	